



Title	提喩に関する一考察
Author(s)	大森, 文子
Citation	Osaka Literary Review. 1989, 28, p. 57-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

提喩に関する一考察

大 森 文 子

1. 序

従来、提喩(synecdoche)と呼ばれる言語現象には、次の二つのタイプがあるとされてきた。

- A. たとえるものとたとえられるものとの間に「全体」と「部分」の関係があるもの。
- B. たとえるものとたとえられるものとの間に「類」と「種」の関係があるもの。

A型の提喩は、例えば、

- (1) There are a lot of good heads in the university. (Lakoff and Johnson 1980)

のように good heads (部分) が intelligent people (全体) を指すような場合を言う。このA型の提喩は、本質的に換喩 (metonymy) と同じであると考えられる。換喩は、現実世界における隣接性に基づくものであるが、この隣接性の概念を広く解釈すれば、全体と部分という含有関係も、内部的な隣接関係としてとらえることができるからである (佐藤1978, 瀬戸1986参照)。一方、B型の提喩は、換喩とは本質的に異なる。例えば、

- (2) 私は昨日花見に行った。

は、「花」の概念と「桜」の概念の意味関係に基づくものであり、現実世界における隣接性に関わる指示関係に基づくものではない。

本論では、A型の指示に関わる提喩に関しては、それを換喩に属するものとして扱い、考察の対象とはせず、B型の意味に関わる提喩を本来の提

喩と考え、これに焦点を当てる。¹⁾そして、このような提喩が意味のどのような側面と関わっているのかを考察する。

2. 類 (Genus) と種 (Species)

(2) のような表現は、一般的に類を示す語によって種を表す提喩と考えられている。確かに「花」と「桜」は類と種という関係を持つ。しかし、「花」が(2)のように提喩として用いられた場合、「花」は種に対する類であるというような説明のしかたは、果たして本当にこういった言語現象の本質を的確に説明するものとなっているのであろうか。

このことを考えるために、(2)と(3)を対比してみる。

(2) 私は昨日花見に行った。

(3) 曲がり角で、犬を連れた人に出会った。

(状況：曲がり角で話者の出会った人が連れていたのはコリーである。)

(3) の話者はコリーを「犬」という語で表現している。ここでの「犬」と「コリー」は類と種の関係にある。この(2)と(3)には次のような相違がある。

まず、(2)では「花」が何の花であるかを聴者が解釈する際に、言語的、あるいは非言語的なコンテキストの手助けを必要としない。言い換えれば、「その花は桜の花である」という言語的な説明がなくても、また、話者が見た花そのものを聴者が見に行かなくても、聴者は「花」が桜を表すということを理解できる。一方、(3)では、話者の言う「犬」がどんな種類の犬かを聴者が理解するためには、言語的、あるいは非言語的なコンテキストの手助けを必要とする。すなわち「その犬はコリーだった」という言語的説明を与えられるか、あるいは話者の言及している犬そのものを見なければ、聴者はその犬がコリーだと理解することはできない。

また、(2)の文を、桜以外の花を見に行ったことを表すものとして用いて、聴者にそれが何の花かを説明しない場合、この文は不適切になる。

- (4) ?私は昨日花見に行った。(文頭の?は不適切性を表す。)

(状況：話者が見に行った花はチューリップである。)

- (5) 私は昨日花見に行った。と言っても桜ではなく、オランダ博覧会へチューリップを見に行ったのである。

(5)のように「と言っても桜ではなく、…」というような言語的コンテキストを与えれば容認可能性が高くなるが、(4)の場合は、そういったコンテキストを与えずに、桜以外の花を表すものとして「花」を用いているので不適切である。一方、(3)の文を、異なる状況で、すなわち(6)のように、コリー以外の犬を連れての人に出会ったという状況で用いても、この文は容認可能である。(7)のように「と言ってもコリーではなく、…」といった説明を加えることは不必要であり、不自然である。

- (6) 曲がり角で、犬を連れての人に出会った。

(状況：曲がり角で話者の出会った人が連れていたのはシェパード／ブルドッグ／秋田犬／スピッツである。)

- (7) ?曲がり角で、犬を連れての人に出会った。と言ってもコリーではなく、シェパード／ブルドッグ／秋田犬／スピッツである。

以上のことをまとめると次のようになる。

(2)では「花」が「桜」を表すものとして用いられ、「桜」を表すということを聴者に理解させるためのコンテキストは不要である。「花」を、「桜」以外の花を表すものとして用いる場合には、それが何の花かを聴者に説明しなければならない。一方、(3)では「犬」はその下位概念(コリー、シェパード、ブルドッグ、秋田犬、スピッツなど)のいずれをも表し得るが、「犬」がどの下位概念を表すのかということを聴者に理解させるためには具体的なコンテキストを必要とする。

(2)と(3)では、どちらも類を示す語によって種が表されているように思われるにもかかわらず、上のような相違が生じるのはなぜであろうか。それは、(3)は類と種の関係に基づくものであるのに対して、(2)は、一

見、類と種の関係に基づいているように見えるにもかかわらず、本質的には類と種の関係に基づくものではないからだと考えられる。類概念は『広辞苑』では次のように定義されている。

- (8) 或る概念の外延が他の概念の外延よりも大きくそれを自己のうちに包括する場合、前者を後者の類概念、後者を前者の種概念という。類概念は多くの種概念を概括する関係にある。例えば、木は梅・松・杉などに対して類概念。しかし植物という、より上位の概念に対しては種概念となる。類と種とは相対的關係にある。

この定義から、類概念と種概念の関係は「外延」に関する包括・被包括の関係として特徴づけることができる。(3)の「犬」という語は、ここでは犬の外延、すなわち、犬のさまざまな種(コリー、シェパード、ブルドッグ、…)のすべてをその要素として持つ集合を表す語として用いられている。(3)の「犬」が、犬のさまざまな種のいずれをも表し得るが、特定の種(例えばコリー)を聴者に理解させるためには具体的なコンテキストを必要とするというのは、「犬」という語が犬のさまざまな種のすべてを外延的に包括する概念を表しているからである。それに対して、(2)の「花」と「桜」は外延的な包括・被包括の関係にあるのではない。もし(2)の「花」が外延的な包括語であるならば、この「花」という語は花のさまざまな種のすべてをその要素として持つ集合を表すということになる。ところが、上に述べたように、(2)の「花」はコンテキストなしに「桜」を表し、「桜」以外の花を表すものとして用いる場合にはコンテキストが必要となる。このことから、(2)の「花」は、花のさまざまな種のすべてを要素として持つ集合を表すものではないということがわかる。つまり、種に対する類としての「花」ではないと考えるべきである。

では、(2)の「花」と「桜」はいったいどのような関係で結びついているのだろうか。この問題についての考察は第4節で行い、その前に、次節では、この問題とも関連性があると思われる、Lakoff(1987)のメトニミックモデルについて言及しておきたい。

3. メトニミックモデル

Lakoff (1987) は、ある範疇全体を理解するためにその範疇のあるメンバーあるいは下位範疇が用いられるような状況をメトニミーと呼び、そのような状況を表示する認知モデルとして「メトニミックモデル」を提示している。Lakoff はメトニミックモデルの一般的特徴は次のようなものであるとしている。

- (9) —There is a “target” concept *A* to be understood for some purpose in some context.
- There is a conceptual structure containing both *A* and another concept *B*.
- B* is either part of *A* or closely associated with it in that conceptual structure. Typically, a choice of *B* will uniquely determine *A*, within that conceptual structure.
- Compared to *A*, *B* is either easier to understand, easier to remember, easier to recognize, or more immediately useful for the given purpose in the given context.
- A metonymic model is a model of how *A* and *B* are related in a conceptual structure; the relationship is specified by a function from *B* to *A*. (Lakoff 1987: 84-85)

そして、メトニミックモデルはプロトタイプ効果の主要な根源であると述べている。例えば、mother のステレオタイプは housewife であり、housewife-mother は mother のあるべき姿として社会が期待するものである。housewife-mother は nonhousewife-mother よりも適切な例として mother という範疇全体の代表として用いられ得る。このことは次の (10) の a と b の適切性の違いによって示される。

- (10) a. Normal: She is a mother, but she isn't a housewife.
- b. Strange: She is a mother, but she's a housewife.

(Lakoff 1987: 81)

(10) の a と b の適切性の違いは、mother という範疇に見られるプロトタイプ効果の現れであるということができる。Lakoff によると、このような housewife-mother のステレオタイプは子育て(nurturance)に関する stereotypical な見解(終日子供とともに家にいない母親は子供を適正に育てることができないという見解)から生じ、この見解は mother という概念を構成するさまざまなモデルの一つである (11) のような nurturance model と結びついている。

- (11) The nurturance model: The female adult who nurtures and raises a child is the *mother* of that child.

(Lakoff 1987: 74)

ここで問題にしたいのは、なぜ housewife-mother が mother の代表例となり得るのかということである。(9) のメトニミックモデルの一般的特徴についての記述の中には、概念Aを代表する概念Bの性質として「Aに比べて理解しやすい、記憶しやすい、認識しやすい、あるいは、一定のコンテキストにおける一定の目的に対して直接的に有益である」ということが述べられているが、housewife-mother といったような特定の概念Bだけが、なぜ「理解しやすい、記憶しやすい、認識しやすい…」といった特徴を持ち得るのか。そこに外界についての人間の理解のどのような認知メカニズムが関わっているのか。

このことを考えるために、次節では語の「内包」に着目して考察を進めていく。

4. 内包

『新英学辞典』(研究社)の meaning の項では、言語記号が意味を喚起する機能として、指示的、描写的、喚情的という三種類の機能が挙げられ、それぞれの機能によって喚起される意味内容として、概念的コノテーション、直観的コノテーション、情緒的コノテーションという三種類の内包が

挙げられている。概念的コノテーションは、語の指示対象の形や性質、動きや用途などの概念総合によって成り立つ意味内容である。また、人間は言語に触発されて、直接事物を思い浮べることができるが、この場合の思い浮べられた内容が直観的コノテーションである。三つめの情緒的コノテーションに関する説明を次に引用する。

- (12) 喚情的機能は、言語記号が言語使用者の中に感情的反応を起こす働きをいう。言語記号は、その意味する事物に対する人々の好悪・快不快の感情や、話し手の聞き手に対する態度などをも表現する。また言語記号自身が雅語・俗語・方言・外来語などのいずれかとなることによってさまざまな感情を喚起する。言語記号の喚起する感情が情緒的コノテーション (emotional connotation) である。

この(12)の情緒的内包が、メトニミックモデルに関して前節で提起した問題点、すなわち、なぜ *housewife-mother* が *mother* の代表例となり得るのかという問題を解く際の鍵になるように思われる。*mother* の情緒的内包とは、*mother* に対して人間が持つ感情である。それは、子供を慈しみ育てるという母親の本性(母性愛)に対する情緒的反応として特徴づけることができる。既に見てきたように、*mother* のステレオタイプである *housewife-mother* は(11)の *nurturance model* と結びつけることができる。この *housewife-mother* が *mother* の代表例となり得るのは *housewife-mother* が一般的に持つ、子供を慈しみ育てるという性質が、*mother* という語の情緒的内包と最もよく合致するからではないかと考えられる。

次の例においても、情緒的内包を表す語として *mother* が用いられている。

- (13) And as for you, giving yourself pious airs about your motherhood, why, *a cat's a better mother than you!* — M. Mitchell, *Gone with the Wind*, p. 922. (イタリック体は筆者。)

上の例において、話者(レット)は、聴者(スカーレット)が子供を慈し

むという母親の本性を持たないことを責めている。彼女が mother の情緒的内包に全く合致しない、すなわち、プロトタイプとしての mother から猫と比べてもなお程遠いということがイタリック体で示した表現により表されている。

Lakoff (1987: 85) には, politician や Japanese のステレオタイプに関する次のような記述が見られる。

(14) The stereotypical politician is conniving, egotistical, and dishonest.

(15) The stereotypical Japanese is industrious, polite, and clever.

(14) の conniving, egotistical, dishonest, そして (15) の industrious, polite, clever は, politician や Japanese に対する感情的評価として特徴づけることができる。ここでも (14), (15) に示されたステレオタイプの持つ性質は, Japanese や politician という語の情緒的内包と合致するということができる。

以上のことから, (9) に挙げたメトニミックモデルにおいて, 概念Aを代表する概念Bが「理解しやすい, 記憶しやすい, 認識しやすい…」といった特徴を持つのは, 概念Bの持つ性質が, 概念Aを表す語から喚起される人間の感情, すなわち, その語の持つ情緒的内包と最もよく合致するからであると考えられる。換言すれば, 概念Aを表す語の情緒的内包と合致する性質を最も多く持つものが, Aのプロトタイプとなり得ると考えられる。

ここで, 第1節で挙げた(2)について考えたい。

(2) 私は昨日花見に行った。

この例についても, 「花」という語の情緒的側面に着目することによって, その性質がうまく説明できる。「花」という語には大きく分けて次の二つの意味がある。

(16) a. 高等植物の枝・茎などに生じる生殖器官。ふつう、がく・花冠・めしべ・おしべなどをそなえる。

b. 美しいこと。はなやかなこと。

(『旺文社国語辞典』より)

(16a)の意味は、「すみれは春の野に小さな紫色の花を咲かせる」というような文に見られる「花」の意味であり、類概念としての「花」の意味を表す。それに対して、(16b)の意味は花に対する私達の感情的評価を表すものであり、この「美しいこと、はなやかなこと」という性質は、(16a)が表す「花」にもあてはまり、更にまた、それ以外のものにもあてはまり得る。例えば「花の顔(花のように美しい顔)」、「花(はなやかさ)を添える」、「職場の花(若くて、明るく美しい女性)」など。²⁾そして、(2)の「花」の意味も(16a)ではなく(16b)の意味であると思われる。「花見に行く」というのは「花のあでやかさ、美しさを見に行く」という意味であって、類概念としての花を見に行くという意味ではない(第2節参照)。そのあでやかさ、はなやかな美しさという性質を最も多く持っている花、すなわち、プロトタイプとしての花が、日本文化の中で生きる人にとっては「桜」なのである。(2)の「花」が「桜」を表すのは、以上のように「花」という語が(16b)のような情緒的内包を表し、その情緒的内包に最も適合するプロトタイプとして「桜」が選ばれ得るからであると考えられる。

次の例についても同様のことが考えられる。

(17) Do you not know I am a woman?
when I think, I must speak.

— Shakespeare, *As You Like It*, III. ii. 263-64.

(17)はロザリンドのせりふである。ロザリンドが、シーリアを質問攻めにしておきながら、シーリアが説明すると、その途中でことごとく口をはさむので、シーリアにたしなめられる。その時に言った言葉が(17)である。ここでの woman も、類概念を表すものではない。話者は「私が女という

類に属するものだということを忘れたの?」ということを言おうとしているわけではない。ここで話者が言おうとしていることは「思ったことを話さずにはいられない」という、女性の持つ情緒的性質であり、そのような情緒的性質を表す語として *woman* が用いられているのである。

次の (18), (19), (20) は, *man* という語が用いられた提喩の例である。(それぞれ, イタリック体は筆者。)

(18) When you durst do it, then you were a *man*; And, to be more than what you were, you would be so much more the *man*.
— Shakespeare, *Macbeth*, I. vii. 49-51.

(19) We are *men*, my liege. — *ibid*, III. i. 91.

(20) Hence, horrible shadow! Unreal mockery, hence! [Ghost vanishes.] Why, so: being gone, I am a *man* again. — *ibid*, III. iv. 106-108.

(18) は、一度はダンカン王の殺害を計画しておきながら、その計画を遂行することを迷い始めているマクベスに対して「あなたが一大事をお打ちあけなさった時は、あなたは男でした。だから、あなたがあなた以上のものにおなりになれば、ますます男らしくおなりのわけです。」と叱咤激励しているマクベス夫人の言葉である。(19) は、バンクォーを殺害することをマクベスに命じられた刺客の一人が、マクベスに言う言葉である。マクベスは、刺客たちに、バンクォーが彼らに対してひどい目に会わせた男だと説明し「貴様たちの忍耐はこれが我慢できるほどに根づよくできているのか」と問いかける。それに対する刺客の応答が (19) である。(20) はマクベスが刺客を差し向けて殺したバンクォーの亡霊が宴席に現れ、怯えたマクベスが口走る言葉である。(18), (19), (20) に出てくる *man* は、いずれも類概念としての「男」を表すものではない。もし類概念としての「男」を表すと考えると、いずれも何の情報価値もない、不自然で無意味な文となってしまう。マクベスや刺客が「男」という類に属するものであることは、話者

にとっても聴者にとっても既知の事実だからである。ここでの man は、そういった類概念としての「男」ではなく、男の強さ、勇敢さ、大胆さというような man の性質に対する話者の感情的評価を表している。つまり、man という語の情緒的内包が、(18), (19), (20) の man の意味として働いていると言うことができる。

次の(21)のような表現や(22)のような同語反復構文(トートロジー)にも同様の現象が見られる。

(21) 彼は男の中の男だ。

- (22) a. Boys are boys.
 b. Kids are kids.
 c. Women are women.

(21) 及び (22) の波線を引いた語は、男や boys や kids や women のさまざまな種のすべてを外延的に包括する類概念を表す。それに対して、棒線を引いた語は、それぞれに対する話者の何らかの感情的評価、すなわち情緒的内包を表現していると考えられる。

5. 結論

提喻(第1節で述べたB型)においては、たとえるものとたとえられるものとの間に類と種の関係は確かに成り立つが、提喻は本来、類と種の関係に基づくものとしてとらえるべきではなく、その語から喚起される人間の感情、すなわち、その語の持つ情緒的内包(emotional connotation)が表現されていると考えるべきであるということを述べた。そして、メトニミックモデルにおいて、概念Bが概念Aを代表するプロトタイプとして用いられ得るのは、概念Bの持つ性質が概念Aを表す語の情緒的内包と最もよく合致するからであるという考えを述べた。

注

- 1) 提喩はしばしば換喩の一種とみなされるが、佐藤(1978)は、俗に提喩と呼ばれているもののうち、換喩に併合されるべきものは、全体の代わりに部分を、また部分の代わりに全体を用いる提喩のみであり、類と種に関わる提喩は、換喩とは異質のことばのあやであると述べている。瀬戸(1986)にも同様の見解が見られる。換喩と提喩の関係についての筆者の考え方は彼らと軌を一にするものである。
- 2) これらは隠喩の例である。Omori(1986)では、隠喩として用いられている語の内包は情緒的内包であると述べている。また、Omori(1988)においても同様に、隠喩の意味に関わるのは対象の物理的性質ではなく、その対象の持つ、話者の情緒に訴えかける性質であると述べている。筆者は、隠喩と提喩は、どちらも情緒的内包と直接的に関わるという点において密接な関係にあるという考えを持っている。この隠喩と提喩の関係については、稿を改めて論じる予定である。

参 考 文 献

- Deane, Paul D. (1988) "Polysemy and Cognition." *Lingua* 75, 325-61.
- グループμ/佐々木健一・樋口桂子訳(1981)『一般修辞学』大修館書店。
- 河上誓作(1986)「認識の投影としての言語—トロープとアイロニーの場合—」『英語青年』第132巻、第1号。
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Ogden, C. K. and I. A. Richards (1923) *The Meaning of Meaning*. Routledge & Kegan Paul.
- Omori, Ayako (1986) "A Study on Metaphor and Simile." Unpublished B. A. Thesis. Osaka University.
- (1988) "Exploration into Mental Spaces: Where Do Linguistic Expressions Come from?" *English Linguistics* vol. 5.
- 大塚高信、中島文雄監修(1982)『新英語学辞典』研究社。
- 佐藤信夫(1978)『レトリック感覚』講談社。
- 瀬戸賢一(1986)『レトリックの宇宙』海鳴社。
- Wierzbicka, Anna (1987) "Boys Will Be Boys: 'Radical Semantics' vs. 'Radical Pragmatics.'" *Language*, 63. 1.
- 山梨正明(1988)『比喩と理解(認知科学選書17)』東京大学出版会。